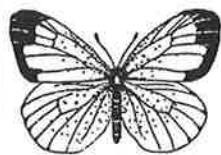


財団だより

多摩川

1990. 6 第46号



キチョウ・夏型(シロチョウ科)
夏型と秋型があり、秋に出たものが
冬を越す。食草マメ科の植物。モン
キチョウより黄色が濃く、きれい。



川原で野外料理(和泉多摩川の川原)

■多摩川現風景■

(2) 火のある風景

今年の1月、狛江市の駒井町地先でドンド焼きが行なわれることを聞いて取材に出かけた。地元の青年会OBが中心になって毎年行なわれているようで、高さ5mもあろうかという塞の神は火をつけるとあっという間に燃え上り、子供達や住民の歓声をあげていた。そのドンド焼きを見た後、二子橋まで歩いていると、今度は世田谷の鎌田地区の住民が川原のヨシ原に火をつけ野焼きを行なっているのに出会った。

市街地の中では今日、たき火にしろゴミ焼にしろ火を燃やすことはほとんどなくなった。これは火災予防のためであるが、水遊びと同じように火を燃やす行為は興味をそそられるものだ。今では火の扱い方を知らない子供が増えていると聞くが、多摩川では先に挙げたドンド焼きや野焼きのほか、焼イモ会やバーベキュー会などで流木やゴミを集めて火を燃やしている光景に出

会う。夏の暑い盛りでも一向に気にする様子もなく、むしろ楽しんでいる。

高密度化した市街地の中では、多摩川のような広い川原は唯一火を使える場であるが、後始末等のマナーはきちんと守っていかなければならない。

・関連する財団の研究助成及び刊行物 学術研究

- ①河川環境に関する計画的研究
進士 五十八 1980 No.50

一般研究

- ②多摩川河川敷を訪れる人々の住環境と多摩川流域のあり方との関係について
喜多野 薫 1981 No.18
③多摩川'86 (財)とうきゅう環境浄化財団 1986

多摩川散歩

●二ヶ領用水を訪ねて（登戸～等々力緑地）

東京映像会員 大石 悌 司

南武線、小田急線の登戸駅で下車して右に歩くと、かつては絹の道でもあった津久井道に出ます。この道筋には江戸時代からの、吉沢石材店と北向地蔵、そして多摩川の土手には、登戸の渡し跡と水道橋の川崎歴史ガイドのパネルが建っています。小田急線の下をくぐり抜けると宿河原堰堤が展望されます。

今から約400年前の慶長2年(1597)に、徳川家康の命により、稲毛・川崎領の代官 小泉次大夫は、約15年の歳月と、多くの農民達を使って、多摩川の中野島附近の取入れ口より、全長32kmの、二ヶ領用水を開削しました。

宿河原の取入れ口からは、完成後20年で早くも、水不足となり増設をした農業用水路です。

昭和49年の大洪水では、近代的な堰堤のために狛江市側の堤防が決壊して、19軒の家屋が流失する場面が、テレビで放映されました。

この堰堤の近くには、洪水の守り神 船島稲荷があります。又ここは花火大会が開かれて、夏の風物詩ともなっています。

宿河原の取入れ口からの両岸、約2kmにわたり桜並木が続いています。地元の桜保存会が、昭和33年より植えたものです。この区間では川崎市による親水化工事が完成しました。川崎の桜の名所として桜祭りが行われて、市民の水と緑の憩いの場所ともなっています。

桜並木の途中には、川崎市緑化センターがあり園内には水車小屋もあって、四季の花や草木が植えられ、野草も多く植栽してあります。

南武線、久地駅の近くに、上河原堰堤で取水した、二ヶ領用水の本流と合流する地点があります。

久地の円筒分水は、昭和16年にコンクリートで改造されたが、昔の二ヶ領用水は耕作面積に比例して、木製の樋の大ききで水量を決めて、四つの組合堀に「分量樋」で分水をしました。

ここは、日照りが続き水不足になると、我田引水の激しい水争いの場所でした。

溝口に入り、大山街道の近くに、日蓮宗の宗隆寺があって、芭蕉の句碑が建っています。墓地には、人間国宝の陶芸家 浜田庄司が眠っています。

国木田独歩「忘れ得ぬ人々」の一節の舞台となった宿屋の亀屋があり、現在の亀屋会館の入口には、島崎藤村による独歩碑が建っています。

大貫病院の大貫家は、江戸時代は大和屋の屋号で幕府の御用商人でした。画家で彫刻家の岡本太郎氏の母親で、女流作家の岡本かの子の生家です。

二子神社の境内には、文学碑が建っています。

中原区宮内には、春日神社、薬師堂そしてマンガ寺として有名な、真言宗の常楽寺があって、本堂の中には数々の風刺画や絵馬があります。

中原街道に沿った小杉陣屋町は、小泉次大夫が陣屋を設けて、この裏には日蓮宗の妙泉寺を建て二ヶ領用水の完成と無事を祈願をしたところです。

等々力緑地には、昭和63年に開館をした、川崎市市民ミュージアムがあって、川崎の歴史や考古民俗等が展示されています。川崎にとって、多摩川は生みの親、二ヶ領用水は育ての親、この展示品は、是非見て欲しいものです。



案内図

私と多摩川



調布堰上流にて(87.10.撮)
右手で小さな子供らが子供達だけで遊んでいた。
この辺は通常は水の中にある。

都立大学理学部 小 椋 和 子

私にとっての多摩川は、調布堰のあたりの多摩川である。それは単に私の住まいがそのあたりであるというだけなのだが、それは決定的な条件なのである。

戦後、小学校にプールがなかったころ、夏になると、学校からバスをもらって、多摩川園の遊園地にあったプールに毎日通った。そのついでに、多摩川でも泳いだのである。たしか、その時には多摩川での泳ぎは禁止されていた。先生から大腸菌がいることと、深みがあるから危険という説明があった。そのころすでに、そのあたりは、あまりきれいな水質ではなかった。川底の石ころがなんとなくぬるぬるしていたし、透明でもなく、茶色い水であったことを覚えている。

それ以後の多摩川は、私にとっては、見るだけの多摩川である。中学、高校、大学を通じて、すこし、暇ができると、自転車で亀の子山古墳に行き、多摩川を遠くに見ながら、物思いにふけるひとときを過ごした。

数年前、多摩川台公園で、古墳の発掘があり、娘と見に行った。多分プールに通っていた頃だと思いが、あのあたりを工事していた。たしか埴輪を見たような気がする。そこで何か面白いものが見られるかも知れないと思ったのだ。まだ、亀の子山の方は天皇陵なので、調査されていないというが、私の記憶違いなのか、その時調査した古墳からは、特に埴輪は出なかったようである。

多摩川は、小学校時代を除くと、水のある風景

の一つになってしまっている。その後も、娘の子供の頃は、ピクニックの場所として河川敷を利用しているし、最近、犬と家族の散歩道である。

私のふるさとの川といえば、たぶん多摩川なのであろうが、私には強烈な川の思い出がある。それは、終戦直前のほんの2、3ヶ月を過ごした疎開先の門井にある小さな川である。今、地図を見ると那珂川にそそぐ、支流の緒川であるらしい。そこでは、私は、何者からも自由で、学校も拒否し、一人で、野山をさまよった。村の子供らが、学校から帰るまでは、あまり危険な遊びは子供ながらさけた。浅い川の中で、魚を見たり、水と遊んだりした。子供らが、学校から帰ると、牛を洗う川の深みで泳ぐのだが、私は泳げないにもかかわらず、一緒にそこに入った。わくわくするような冒険だったのである。この時の自分の姿は、なぜか、非常に客観的に覚えている。シューーズにズロースで川にも入れば、道を歩いている。夜ともなると、蛍が降るように舞い、同じように、流星がいく筋も空をかけぬけた。このほんの短い間に、私は、虚弱児童から山猿へと変身した。

だから、子供にとっての川は、見る川だけでは、ものたらないのであろうと、私の乏しい経験から推察する。

ところで、多摩川を研究者の目で見ようになってから、すでに20年にもなる。今も続けているが、定点観測と称して、ここ数年、ほとんど毎週のように多摩川の調布堰を観察し、写真を取っている。そのたびに、色々なことを発見するが、コンクリートの護岸が行くたびに増えるのは、悲しい限りである。話が少しそれたが、ある時に、10月であるが、多摩川の調布堰の上流の水がひいて、川底が露出して、川の中に入ることができた。そこでは小学校にあがる前と思われる幼児が、小さな長靴をはいて遊んでいるのである。普段は水の中である。その姿に、私の昔を発見して、できたら、水浴びもできる位の水質だったらどんなに喜ぶだろうかと、あれこれ、考えがかけめぐったものである。



多摩川紀行

山道省三

⑤ 小菅川

この多摩川紀行は徒歩やカヌーで多摩川を踏査したいという考えで昨年からスタートした。

カヌー行は前回まで奥多摩の氷川から川井まで下った記録を紹介した。ひき続きカヌー行を紹介する予定だったが、カヌーの空気もれの原因が解明できないことや水がまだ冷たいのでは？という軟弱な理由で夏場を下ることにし、今回は5月3日、4日の「源流祭」に訪れた小菅川を紹介したい。

山梨県小菅村は、奥多摩湖に流入する小菅川の流域をほぼ包含する約51.96km²、人口1,238人の奥多摩の急峻な山々に囲まれた小さな村である。人が少ないのは住む場所がないと言った方が適切なくらい、平地が少なく、わずかに小菅川の河畔に平地があって、集落はそこに集中している。

小菅川は奥多摩湖に流入する地点からほぼ12kmほどの川であるが、流れはまさに源流にふさわしい清流さを保っている。以前紹介したこともあるがこの流れを保つため、東京都、山梨県、小菅村、丹波山村は、昭和57年から「特定環境保全公共下水道」の整備を行ない、多摩川本川にあたる丹波川（丹波山村地区）ともども下水道による水質保全対策を行ってきた。現在、村内のほとんどの家庭や旅館からの排水は「多摩清流苑」と名付けられた浄化センターで極めて高度な処理がなされ放流されている。

5月3、4、5日の3日間にわたって行われた「多摩源流祭り」は、多摩川の源流を多くの人に知ってもらおうとの意図で始まり、今年で4回目になるという。村の中心を流れる小菅川を舞台に、マス釣

り大会や日本一のお松焼きといわれる火の祭典、あるいはさまざまなショー、たくさんのお店など盛りだくさんの行事とともに、今年初めて源流を考えるシンポジウムが開催された。その内容は1ページで紹介されているのでご覧いただきたいが、祭りの最中に小菅川を少し歩いてみた。

村中心部の小菅川は、すでに河川改修が行われ、流路は河床の中心に固定され落差工が設けられている。この落差工に村営釣り場が併設され、代表的なレクリエーション施設となっている。流水を遡って行くと、流水をうまく引き込んだイワナやヤマメ、ニジマスなどの養魚場が見られる。現在4ヶ所の養魚場がありヤマメに力を入れているとのことであった。村営釣り場から上流は一部の禁漁区を除き、渓流釣りのメッカであり、毎年3月15日から9月30日まで解禁される。

今回訪れなかったが、さらに上流部には、滝のしぶきにあたると子宝に恵まれるといわれる「雄滝」。や、そのむかし大蛇が棲んでいたと言われさまざまな伝説が言い伝えられている「白糸の滝」などがあり、ハイキングコースが整備されている。

小菅村はこの清流の小菅川と奥深い山々の自然を生かした自然レクリエーションによる観光客の誘致に力を入れている。それとともに多摩川の源流を多くの人に知ってもらい、交流することを望んでいる。

都市に住む多くの人たちは、自分の飲む飲み水がどこから来ているのかほとんど知らない。しかし少なくとも東京に住む200万人は多摩川の水で生活していることになる。一度訪ねてみて、清流を守るための地元の人々の姿勢なり意見を聞いてみることは、恩恵にあずかる立場の礼儀のような気がする。

小菅村と小菅川



財団からのお知らせ

〈第一次研究助成選考結果〉

去る3月19日第28回定時選考委員会を開催し、平成2年度（第一次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究はA類研究8件、B類研究3件です。研究課題は次のとおりです。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
（A類研究）		
●近世多摩川流域史の史的研究（田村家文書を中心として）	多 仁 照 廣	敦賀女子短期大学日本史学科教授
●安定同位体を利用した玉川上水における浸透量と脱窒量の評価	田 瀬 則 雄	筑波大学地球科学系講師
●多摩川下流及び河口域における有機スズ汚染の動態	竹 内 正 博	東京都立衛生研究所理化学部研究員
●多摩川河口域における悪臭発生機構に関する基礎研究（特に底泥における硫黄起源の悪臭物質について）	高 野 稔一郎	東京大学教養学部助教授
●武蔵野台地の段丘崖に分布する著名湧水の湧出機構の解明とその保全、ならびに環境モニターとしての機能の検討	新 藤 静 夫	千葉大学理学部教授
●多摩川流域の神社分布の特質とその信仰形態をめぐる研究	牛 山 佳 幸	信州大学教育学部助教授
●多摩川流域の田園景観に関する研究	進 士 五十八	東京農業大学農学部教授
●多摩川における有機金属化合物の化学形態及び濃度分布とその生成機構に関する研究	田 中 茂	慶応義塾大学理工学部専任講師
〈B類研究〉		
●玉川上水系の用水の地域に果たした役割に関する調査—砂川用水の水利用を中心に—	小 坂 克 信	八王子市立第三小学校教諭
●多摩川中流域の屋敷林の研究—特に玉川上水周辺の屋敷林の構成—	秋 山 好 則	東京都立武蔵丘高校教諭
●多摩川上・中流域の動植物方言調査及び動植物と人々のかかわりについての民俗学的考察	岡 崎 学	中野区教育委員会歴史民俗資料館館長

研究助成成果検索システム完成

財団では1988年度までに発行した研究助成成果報告書のうち学術研究106件、一般研究52件をマッキントッシュコンピュータにより検索システムとして完成させました。（1989年度以降は研究成果完成次第追加する）

検索方法は①助成成果の内容を90項目の標準キーワードに分類し検索する。②本川の上、中、下流及び支川名により検索する。③対象物（湧水、植物、橋……）、対象部（堤防、崖線……）により検

索する。④代表研究者及び共同研究者により検索する。⑤その他により検索する。のいずれか、または組合せによって目的の文献を検索するものです。

コンピュータはどなたでも比較的簡単にご使用できる様に検索マニュアルを用意していますので、来団されて御自由にお使い下さい。また一応完成しましたが、改良を加えていきたいと思っておりますので、ご意見をいただければ幸いです。

多摩川源流の森と水を守るシンポジウムに協力して

新しい試み「多摩源流の森と水を守る」シンポジウムが、小菅村・丹波山村・奥多摩町の協力で小菅村公民館で行われた。都心から3時間かかるこの過疎地に、予定を100名程上回る約300名の申込者が集まった。このシンポジウムは5名による「話題提供方式」で行なわれ、工学博士で下水文化研究者の稲場紀久雄氏は「古老の語る多摩川の森と水」の話の中で、過酷な水汲み労働が社会に仕込まれていた時代とはいえ、古老たちは節水社会のための共通の認識として5原則を徹底した生活を送っていた、と述べられた。その5原則とは(1)水は水瓶から必要なだけ柄杓で桶に汲み取って使う。(2)一度使った後の水も簡単に捨てず、別の目的に使う。(3)綺麗な水でなくてもよい場合には綺麗な水は使わない。(4)風呂水を節約するとともに、残り湯は有効に使う。(5)使わなくても辛抱出来る場合は使わない。という事であった。蛇口文化に慣れきった私達にはこの話と川の清澄さとの関係に改めて認識を深くした。東京都都市計画局の谷口氏は「多摩川を守る流域住民の意識調査」による、「どうすれば清澄な水を保持し続けられるか」の質問に対しアンケート結果の一位は「下水

道完備」で「住民意識の向上(教育・心がけ)」がそれに匹敵する件数で二位を占めたと述べた。更に治山・治水(緑化・植林)等必要であるという意見も報告された。小菅村出身で元東京都水道局長船木喜久郎氏、並びに巨樹を守る会の美術家平岡忠夫氏の体験談では大変興味深い話が聞けた。また河川工学の芝浦工業大学教授高橋裕氏は、「お金では買えない価値のある自然、大地と水に根づいた文化のありがたさに気づいた我々は、自然を営利の対象としてでなく多摩流域文化の保全と蘇生のために」と説いた。いづれの方々も多摩川源流をもっと見つめ直そうとのことであった。多摩川源流は自然も豊かで、川も清冽である。しかし巨樹の中には天災ではなく人災によって減っているものもあるという。普通の樹木においては尚更であろう。小菅川の釣り人の川に対するマナーもほめるわけにはいかない。多摩川源流は奥多摩湖を含めて東京都民の大切な水瓶である。下流の人々は、多摩川源流をもっと知り、上流の悩みを解く努力が必要ではないだろうか。このシンポジウムが新しい上流、下流の交流の契機になることを願いたい。

常務理事 赤羽 厚

——多摩川'90の発刊について——

今年は昨年に引き続き「多摩川用水路物語 その2」と題して、身近かな水路の今後について編集しました。

〈総集編〉

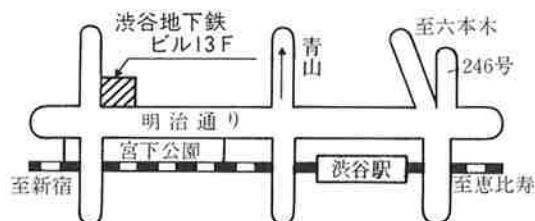
今回は、とくに「新たな地域用水をめざして」と題し、いまある水路のみならず、都市に水路を創ろうという立場で、都市計画、まちづくりの場での位置づけを考えてみました。

〈資料編〉

多摩川流域にある農業用水路につき、昭和50年から62年までの取水口、取水実態に関するデータを東京都の文献をもとに一括収録しました。

以上、ご希望の方は財団事務局までお問い合わせ下さい。

- 発行日 平成2年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (048)831-8125